
異常で過負荷な臆病者と無礼者

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常で過負荷な臆病者と無礼者

【Nコード】

N 6 2 9 6 X

【作者名】

熱血バレー

【あらすじ】

神の手違いで死んだ主人公、二タ子樹^{ふたしいつき}。証拠を隠すため転生させられたのは、めだかボックス？？
二重人格である主人公は、果たしてどうなるのか？
(作者は、文才の欠片もないのでご了承ください)

ブログ 上(前書き)

まだ完結していないのが2つもあるのに投稿しました。
↑この作者はバカです。

ブローグ 上

「ここはどこ？」

眼鏡をかけた少年が目を覚ます。

ここは、真っ白で何もない世界だ。そして、少年の前に一人の男がいた。

「ここはどこかって？現世と冥界の狭間さ。君は、さっき死んだ。」

「????」

「死因は、交通事故。少女を助けようとしてね。」

少年は、思い出す。

数時間前

登校途中、居眠り運転のトラックが少女をはねようとした。少年は、なにを考えたのでもなく勝手に体を動かしていた。それで死んだ。

「思い出したかい？まー君が死んだのは僕の手違いでさ。君に「あのーあんだ誰ですか？」は二次げん「無視すんなー」。葬式始めんぞ。」

「ごめん、ごめん僕は神さ。見習いだけど・・・。（何だ今の殺気

「？」

「神？？」

「そう神だ。見習いだけど……。っで話続けていい？」

「どうぞ、自称見習い紙さん。」

「紙じゃなくて神だから。後見習いを強調するな。」

「すみません。自称神さん（笑）」

「（笑）邪魔だよねー。もういいよ。っでさっきの続きね。」

「つまり、神の手^{あんた}違いで死んだ俺を、証拠を隠すために転生させるってことだろ。」

「？？（全部言われたよ。）御察しの通り。で、君^{あなた}たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらっよ。」

ブローグ 上（後書き）

ブローグなのに二話になりそうです。なんて、文才がないんだ。

ちなみに、ニタ子っていう地名は実際にあるそうです。

プロローグ 下（前書き）

プロローグ 2 話目です。

プロローグ 下

「御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらうよ。」

「君たちってことは人格が二つあることに気づいたか。つま、死因を思い出したところから裏が出たな。あとこのことは、アイツには内緒だからな。あとめだかボックスの世界で原作ブレイクしてもいいのか。オレのためにも、アイツのためにも。」

「はー、わかった。で、気づいているとは思っけど現世の時点であの子は、異常を持ってんね。」

「アイゲーム見稽古のことか？」

「それぞれ。で、転生するに当たってちょっとプレゼントがあるんだ。」

「何だ、それは？」

「神からの贈り物プレゼント

？お金の心配なし

？それぞれボクから異常と過負荷をアブノーマル マイナスプレゼント

？お互い5つまでお願いOK

ただし、？であなたは異常は持てない。逆も一緒。

こんなもんでどうですか。」

「まあいい。で？はなんだ。オレにはどうせ過負荷だろうが。」

「君には、裏切りの樂園を、あの子には、憎まれ知らずをあげるよ。」
トレチャリール・ティル・ナ・ノーグ
アンリセン

「面白い、じゃーそろそろ連れてってくれ。めだかボックスの世界へ。」

「OK!逝ってらっしゃい。」

「おい、字がちg」

さあ、第二の人生、スタートです。

プロローグ 下（後書き）

見稽古は、刀語の鑓七実を参考にしました。
また、裏切りの樂園は、Paradise Lost のサビから
とりました。

両方大好きです。
そして、最後に

プロローグ長!!

登場人物紹介

ふたこいつぎ
二夕子樹 表人格

性別 男

見た目 そこそこイケメン。というより女顔。
いつも眼鏡をかけている。髪は、基本黒。

一人称 ボク

年齢 16歳

好きなこと、もの 人助けをしている人
野菜

嫌いなこと、もの 人が傷つくこと
動物（魚も含む）
臆病者（自分）
肉

アフノーマル
アイゲーム
異常
見稽古

ただで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の1回は、50%しか使
うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。
現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。

見た

アンリセント
憎まれ知らず

神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ON、OFFの切り替えができる。

ふたごいつき
二夕子樹 裏人格

性別 男

見た目 表とそう変わらない。ただし、少し目がつり上がる。
眼鏡はかけていない。髪は、基本白。

一人称 オレ

好きなこと、もの 人を傷つけること

人を貶すこと

肉

表人格

嫌いなこと、もの 偽善者

ナルシスト（誰のことかお分かりですね）

敬語

野菜

マイナス
過負荷
トレチャリール・ナ・ノーグ
裏切りの樂園

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ON、OFF可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は200%使う

ことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることが
できる。（１人だけ）

まーこんな感じです。また、異常や過負荷は増やしていきますの
で、ある程度たまったら能力のみ紹介したいと思います。

オレからボクへ（前書き）

ついに、転生しました。

オレからボクへ

「ここは、どこだ？」

ニタ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何だ、これ？」

『これを読んでいるということは無事転生できたんだね。もし君が裏人格なら頼みがあるんだ。机の下に表人格用の手紙があるからこの手紙を読み終わったら、その手紙を机の上においてほしい。つまり、裏人格用の手紙を読む↓その手紙を抹消↓机の下を表人格用の手紙を見つける↓机の上に置く、ってわけだ。何でこんなことをするのかというと、この世界にまだ裏人格^{キミ}は、存在してはいけな^いんだ。でも大丈夫。いつか君も原作世界にいてもよくなるから。まーそんなわけで当分君は登場しないでね。それじゃーバイバーイ。

b y 神』

「何の予告もなしにオレをこの世界に連れてきやがって、それでこの手紙か。まったく世間知らずもほどがある。（オレがいえないが）まあいい。オレは、少し寝るか。」

オレからボクへ（後書き）

最後に、

裏人格「ここは、どこだ？」

神「もちろん、箱庭総合病院ですよ。」

表人格「つ、ついに来た！。」

ちょっとキャラ壊れました（笑）

スタート 第2の人生（前書き）

二話続けて短いですねー。

あと、樹の顔を女顔にしました。でも男に代わりはありませんよ。

スタート 第2の人生

「ここは、どこ？」

ニタ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何、これ？」

『これを読んでいるということは、無事転生できたんだね。真つ白な世界でも会ったと思うけど覚えているかい？ボクは、神さ。で、君はボクの手違いで死んでしまったんだ。だから君にはめだかボックスの世界に転生してもらったんだ。突然の話で驚いているかも知れないけど君の好きな漫画なんだからいいでしょ。この世界では、原作ブレイクしてもいいし、異常も使ってもいいよ。ちなみに君の持っている異常は見稽古と憎まれ知らずなんだけど分らなかったら第3話を見てね。あと、そろそろ君とのところに善吉君が来ると思うよ。その後、めだかちゃんにも会い、善吉君の名言が出るといいね。じゃ、バイバーイ。』

b y 神

「ここが、めだかボックスの世界？あつ、善吉だ。」

「僕は人吉善吉。 君の名前は？ 一緒に遊ぼうよ！」

こうして、ボクの第2の人生が始まった。そして、15歳の春、旧友人吉善吉と1年1組で再会を果たす。

スタート 第2の人生（後書き）

善吉の名言の意味は分かりますよね。ちなみに、病院でめだかや襦、飛沫達にも会っていて、病院は今でも残っています。↑原作ブレイク出たー！！

また過去については、番外編としてやっていこうと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言っけど忘れられた人間の気持ち考えたことある

サブタイトルは、いつもこんな感じにしたいと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言っけど忘れられた人間の気持ち考えたことさ

15歳の春を迎えた僕は、今日もまた校門をくぐっていた。そして、常々思っている。箱庭学園でか！！

つで、今日は、異常な女が人の上に立つ日だ。そう、今日は新生徒会長発表日。

新生徒会長の黒神めだかが全校生徒の前で演説を始める。

「世界は平凡か？」

異議なし。

「未来は退屈か？」

たぶんそーじゃない。

「現実 is 適当か？」

Yes of course .

「安心しろ、それでも生きるとは劇的だ！」

安心なんかできっこない。ボクなんか毎日毎日恐怖の連続だ。

「そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！」

今までの前置きは必要でしたか？

「学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。」

悩み事は、いえないからこそ悩み事なんだよ。

「24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける。」

それは、ストーカーにまで発展する。

ってなわけで、めだかちゃんの発言に一言ずつ文句を言ってみた。でもボクは、それを面と向かって言えない。そんな、臆病者が嫌いだ。

ボクは、臆病者を恨みながら1年1組へと向かう。

すると、原作と同じく善吉と一人の少女が話していた。言わずも知れたブラックホールの胃袋を持つ不火知である。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるつつつかさー」

その女子の言葉に、そばにいた男は反論する。

「カット！あれは人の前に立つのに慣れてるんじゃないよ！人の上に立つのに慣れてんだ！」

そんな会話を聞きながら、ある問題に直面した。なぜか、二人は、ボクの席のところで話しているのだ。せめて善吉とはもつと感動的

に再会したかったが、仕方ない。

「ちょっとそこいいですか？」

「あつごめんごめん、つてお前」

（感動的ではないが、気づいてくれるだろう。）

「どっかで俺と会った？」

「つな、完全に忘れられている。まーいつか。他人のふりにて気づいたら脅かそう。実質、2ヶ月しかあの病院にいなかったし。」

「えっ初対面のはずですが。」

「名前は？」

「これって気づいてもらうチャンスだね。うん、きっとそう。」

「ニタ子樹」

「えっ！！」

「驚いてるぞ善吉。やっと気づいたんだね。」

「男だったんだ。俺はてっきり女だと思ってた。」

「私も、私も」

「これから、一緒のクラスだ。よろしく。」

「よろしく」

「ようよろしくお願いいたします。」

シヨックだ。完全に忘れてる。これを若年性アルツハイマー病と言わずになんと言うだろうか。

と、落ち込んでいるボクの横で善吉が「俺は生徒会には入らない。なーんて言っただかちゃんに強制連行（笑）。ここで、ボクにもうひとつの疑問が。」

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょう、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。ニタ子同級生。いや、“樹”。」

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく 上

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょう、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。ニタ子同級生。いや、“樹”。」

「おっお前生きてたのか。」

「いや、人を勝手に殺さないでくださいよ。でもなんで死んだことに？」

すると、二人が説明を始めた。

長かったのでまとめるところだ。

？病院破壊未遂の容疑者になる。（もつとも、飛沫達の“偉業”を阻止しすべての罪を自分のせいとし、助けたため）

？転院指令を受ける。（いわば、追放）

？転院先は箱庭総合病院の末端施設であつたため、今まで以上の実験が行われるという話を聞く。

？二人は死んだと思ひ込む。

「、というわけだ。」

「でも生きててよかったぜ。でも、なんでお前が1組なんだ？1組でもおかしくないのに。あと……。」

「あと？」

「お前、いつからそのー、女らしくなったんだ。」

「善吉よ、まさか樹に恋したわけではあるないな。樹は、あくまで男だぞ。」

「あくまで、ってボクそんな女に見えますか？」

「「見える！！」」

（ハモったってことは……）

樹の頭の上に負のオーラが漂う。

「そんな落ち込むでない、樹よ。」

「だって、ボクは正真正銘男ですよ。なのに、女だなんて。」

「だから、女じゃなくて女に見えると言っただけだぞ。（こいつの心って昔から弱かったっけ？）」

「まーもういいです。で、1組にいる理由ですがまだ、理事長が気づいてないだけでたいした理由はありませんよ。」

「わかった。やっぱりお前異常なんだな。でもいいよ。こうして

昔と同じように話ができるから。」

っで、話は進み、今ボクは剣道場の前にいる。

「あ？誰だお前ら。」

「1年13組ry。」

今後面倒なのでさっさと説明すると、不信任2%の人たち（門司先輩ら）にめだかが『上から目線性善説』を披露し、それk

「おい、樹。どこ見ておる。もちろんお前も素振り千回だぞ。」

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

上（後

樹「まだここまでは、よかった。原作を読んでいるのでこの展開も予測していた。だから耐えられた。でも次回、・・・。」

さあどうなるでしょう。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

下（前

祝PV3000 & ユニーク700

見た下さった方々本当にありがとございます。

今後も『異常で過負荷な臆病者と無礼者』をよろしく願います。

感想大大大募集中!!!!

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく

下

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

そして、めだかが倒れる。……。っておい！！だれか突っ込んでほしいよね、ココ。あの異常の塊のような人が倒れたんだぞ。ボクの叫びで。

「すまない。ちょっとめまいがしてな。ここ数日頑張りすぎたな。」

おい、その言葉、あなたがもつとも言っではいけない言葉じゃん。（えっとー、まー原因はめまいなんだね。よかった。）

というわけで、一件落着。とは、いかないのが現実の厳しさなんだよ。今日もまた、ボクは剣道場に来た。というより、善吉に誘われ、行ってみたらこの有様である。

「お前も来たのか。もちろん来たならそれなりのお礼をしなきゃいけないーよな。」

「お礼なんて結構です。では、ボクはこの辺で。」

「お、じゃーな。いつでも言うと思ったか？甘いんだよ。」

（あと少し、あと少しで門司先輩達が起き上がる。）

「日向君？ なっなんでこんな風になっているの？ まずそこを教え

てもらいたい。」

「一生徒会長（バケモン女）に草むしりを頼んだんだけど、うまくいなくてねー。だから変わりにボクが草むしりをしているんだ。」

「じゃー雑草、って門司先輩方のことなんですか？」

「もちろん。あ、でもこうやって時間稼ぎしても無駄だぞ。あの女、今頃役員募集演説の真っ最中だから。」

（ココで、門司先輩の回想場面だな。いま、ボクは何を考えているのか？）

「ま、待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねーよ。たったい思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

（き、キター。門司先輩かっこいい）

「うつぜ。ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ。剣道三倍段って知ってつか？ボクはあんたらの三倍強いつて意味だ。」

（ココで善吉が立ちあが・・・らないっておい！！ココで原作ブレイクしちやってんじゃん。やっぱボクのせいかー。だったら）

「し、真剣白刃取りだと？」

「そういえば、さっき剣道三倍段って自慢してたけど、初心者ボクには初心者になるの？ほら、0×3＝0でしょ。それとも、実

力って意味だったの？ならボクがそのプライドを切り裂いてあげよ。」

そして、門司先輩から木刀を借りる。（正式には、無許可だか）

「どいつもこいつも面倒くせー。お前剣道三倍段って知ってっ面倒くさいのはあなたです。ホント、ボクが安心できるよう静かにしててもらいますよ。」ッガ」

ってことで解決です。善吉は、ボクの声で驚いたらしくそれで目が覚めたそうです。

その後、日向君も、めだかに『上から目線性善説』を披露され、無事改心（？）したとさ。

っえ！樹、キャラ変わりすぎって？あれは、門司先輩方を雑草扱いしている日向君にきれたからだよ。何が剣道三倍段だ。っと言うことを今日も言い出せず、胸に溜め込む臆病者^{ボク}だった。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

樹「サブは、ボクの心の叫びです。」

有吉先輩の話は、カットさせていただきます。本当にすいません。

人に何かおごってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ

ここは、食道だ。

おい、字が違う！！食堂だよ。ブラックホール 不知火と一緒に。

なぜ、こうなったかと言うと・・・

昼食を取ろうとしたときのことだ。いきなり、善吉が

「樹、お前も今から食堂へ行くところか？もしそうなら、一緒に
行こうぜ。」

「うん、いいよ。ところで、隣の人は？」

「あつ、こいつは、「不知火 半袖だよ」「ってことだ。」

「不知火ってことはまさか、理事長の孫ですか？（まー知ってる
けど）」

「うん、そうだよ」

という訳で、ボクは今食堂にいる。でもなぜか二人つきりだ。善
吉はトイレにいくと言いながら帰ってこない。

「あれ？善吉遅いねー。善吉には樹に言うなって言ってたけど言

「っちゃうね。今日、樹のおごりってことだから。」

「えっ？今なんて？」

「だから、樹が今日の罰ゲームおじってことだから。」

「ぜ、善吉の裏切り者————！！！」

こうして、ボクの財布から諭吉さんが一人旅立っていった。

「待って、待ってくれー。諭吉殿。」

「何一人で言ってるの。馬鹿みたい」

そのころ、神は

「皆さん、久しぶりの登場です。こう見えても、毎日樹のことはリアルタイムで観察しているからね。で、お金の問題なんだけど、電気代とかは、何とかなるけど現金はねー。月10万しか払えないから、おごりは残り9回しかできないね。ドンマイ、樹。」

「ヘークシユン！」

「樹、風邪引いたのか？」

「うるさい、裏切り者。善吉のせいで精神病にかかりそうだよ。夜もこれじゃー眠れないじゃないか。」

「有明先輩みたいなこと言っなよ。」

「なら善吉が言わせないよう、これ以上ばくに精神的ダメージを与えないで欲しいな。」

「ごめん。」

「まーいつか、じゃーね。また明日。」

「おう、じゃーな。」

今日は、今日で散々な日だった。こんなときに、もしも、ボクの怒りを買ったら、またキャラ崩壊しちゃうそう。あれ、今いたのは、

「貴様。王である俺の目の前を横切って走ってよいと思っているのか？」

よし、君はボクの怒りを買ってくれた。悪いけど、きょうは、そんなに安くないからね。

「もちろん。ってか、お前誰？まさか、自分で王様気取り？マジださ。ナルシストにも、程があるがあるぞ。お前のあってもないに等しい脳みそで考えろ。カスごときの分際が。」

やっと、裏人格^{オレ}が登場か。

人に何かおこってもらったとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだよ
やっとな裏人格の登場です。やっぱ、現世でも相当嫌ってたからしか
たない。

最後のセリフの中に二人の言葉が入ってます。

だいたいオレは神だとか天才だとかいつてる奴に限って実はたいしたことない

王土ファンの方々、申し訳ございません。

祝PV5000、ユニーク1000

だいたいオレは神だとか天才だとかいってる奴に限って実はたいしたことない

やっと、裏人格が登場か。

こいつって、人間扱いしなくていいよな。そうすればオレが殺つても罪にはならないしな。というより、マジ殺してー。だから、

ざまーみる。何ならもつといたぶつてやろう。

[illegible]

「二子樹、1年1組だ。」

「1組だと??」

「悪いか?」

「いや、少しきにん『平伏せ』ッグハ!!な、何!!」

だが、王土が前を見たとき、そこには誰もいなかった。

「はー疲れた。これで、オレの恨みの1厘ほどは、果たせたな。
最後に、アイツの驚く顔見たかったなー。じゃ、そろそろ、選手交^{バトンタ}
代^{ツチ}だ。」

樹の人格が元に戻る。

「あつ、あれ王土は、どこ行つたのかなー。まーボク、あん時怖
かつたしいつか。」

そのころ神

「よく考えれば、裏人格^{アイツ}も異常、元から持ってたんじゃない。」

だいたいオレは神だとか天才だとかいつてる奴に限って実はたいしたことない

異常紹介

バトンタッチ
選手交代

特定の人間と場所を入れ替えることができる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6296x/>

異常で過負荷な臆病者と無礼者

2011年10月21日02時01分発行